

‘(be) V ing’ の意味と特質

葛 西 清 蔵

0. はじめに

「動名詞」、「現在分詞」という名称はべつにしても、‘V ing’ の用法をまとめると、Schibsbye (1970 : 57) の (1 a~e) のようになるであろう。

- | | | |
|------|------------------------|--|
| 1. a | a substantive | I gave him <i>my blessing</i> . |
| b | a gerund | I am proud of <i>being</i> your wife. |
| c | the present participle | What are you <i>looking</i> at? |
| d | an adjective | a <i>strapping</i> fellow |
| e | a preposition | I will communicate with you <i>concerning</i> your friend. |

(1 a~e) のうち、表題のもとで検討しようとするのは、(1 c) のような「現在分詞」にかかわるものである。つぎの文からみていこう。

- | | |
|------|-------------------------------|
| 2. a | I saw John cross the road. |
| b | I saw John crossing the road. |

(2 a) では、John が道路をよこぎるのを、始めから、終わりまで、「出来事全体」(complete event) (Swan 1995 : 284) を見たのだといい、(2 b) では、John がよこぎる途中を見たのだという。おなじ cross, crossing をふくむつぎの文、

3. a John crossed the road.
b John was crossing the road.

(3 a) では、過去の「事実」をさし、(3 b) では、過去の「動作の進行」をあらわすという。ところが、(3 b) とおなじ 'be V ing' をもつ

4. a Jack is walking to school this semester.
b We're leaving for Boston tonight.

(4 a) では、「動作の反復が転じて行為者の習慣」をあらわし、(4 b) は「近接未来」をあらわす (江川 1985 : 230) とする。

以上のような、(2 b) などのもつ 'V ing' の意味、また 'be V ing' のもつ「進行」、「習慣」、「未来」などの意味をどう考えればよいのか、検討するのが本稿の目的である。

表題のテーマについては、「現在分詞」'-ende' と「動名詞」'-ung' の混同など、たしかに「歴史的ななりたち」を考慮したほうが理解しやすい点もある (中島・毛利 1957 : 157, 158) と思われるが、ここではその方法をとらず、あくまで共時的な説明をこころみることにする。

1. では 'V ing', 2. では 'be V ing' の意味を検討し、'V' のあらわす「一瞬」が「存在」する、とし、「進行」、「習慣」、「未来」などの意味がどこからくるかをみる。3. では 'be V ing' めぐって問題になる点を三つを検討する。4. では 'be V ing' の特質を検討し、これは話し手の視点が事象の変化に集中した表現であることをみる。5. はまとめである。

1. 'V ing'

'be V ing' の性質を考えるには、'be V ing' そのものではなく、まず、'V ing'

のみを対象にするほうが考えやすいであろう。まず、(5 a, b)を出発点とする。

5. a *He caught the thief steal the money.

b He caught the thief stealing the money.

(5 a, b) の steal, stealing は (2 a, b) の cross, crossing に相当するであろう。つまり、steal では、steal という動作が始まり、それが終わるまでの全体をあらわし、stealing はその一部をあらわしている、ということになる。ところが、金を盗ろうとする行為の始めから、終わりまでを捕らえるということは不可能である。捕らえるのは、盗みをする行為の、ある「一瞬」の場面のはずである。(5 a, b) とおなじ catch をふくむ (6 a, b) で、

6. a ?You won't catch him do it twice. (Palmer 1987)

b You won't catch John doing anything that involves hard work.

小西 (1999 : 231) は、catch のあとには「doing の代わりに原形不定詞を用いるのは不可」といつている。

ここでみるかぎり、‘catch N V ing’の‘V ing’について、

7. a catch と‘V ing’は「同時」でなくてはならない、

b ‘V ing’は「一瞬」でなければならない、

ということになる。(5 a) が許容されないのは、steal のもつ「始めから終わり」までという時間のながさと、catch の必要とする「一瞬」とが一致しないからであり、また逆に、(6 b) が許容されるのは、catch の要求する「一瞬」と、stealing のあらわす「一瞬」が一致するからであろう。このことは、つぎの例でも確認できる。

8. a *In this photograph you can see Joan blink.

b In this photograph you can see Joan blinking.

(Kirsner and Thompson 1976)

c John was writing a letter an hour ago and he's still *at it*.

(斜体引用者)

「写真」のような、動きのない、「一瞬」の「凍りついた動作」(frozen action)を写し取ったものには、「始めから終わりまで」というながさをもつ blink は不適切で、「一瞬」をきりとしてあらわす blinking がふさわしいのである。blinking のほうは、始めも終わりもなく、「変化なく」あるいは「静的」(same or static)からである (Kirsner and Thompson 1976: 171)。⁽¹⁾ さらに、(8c) の was writing という部分を 'be at it' と表現できる (荒木 1986: 288) ことは注目してよい。この 'it' とは、まさしく「一瞬」をきりとした場面でなくてはならない。ここでは、

9. 'V ing' は、Vであらわされるものの「一瞬」をきりとした場面の表現である、

ことを確認しておこう。

2. 'be V ing'

前節では、'V ing' はVがあらわすものの「一瞬」をきりとした場面の表現であることをみた。つまり、'V ing' 自体に「進行」、「反復」、「未来」などの意味をもたないことは明白である。では、どのようにして、'be V ing' が「進行」、「反復」、「未来」などの意味をどのようにしてもつようになるのであろうか。以下ではこのことを検討する。

'V ing' 自体は「一瞬」しか表現しえないのであるが、これが「進行」、「反復」、

‘(be) V ing’の意味と特質 (葛西清蔵)

「未来」の意味をもつのは‘be V ing’のように‘V ing’が‘be’と共に起したときである。ということは、‘be V ing’が「進行」、「反復」、「未来」などの意味をもつ理由は、be そのものに求めざるをえないことになる。つぎに、be について考えてみる。

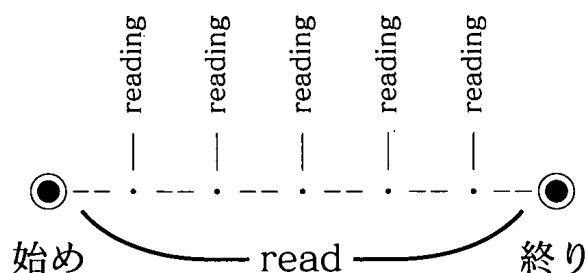
‘be’そのものは「存在する」という中核的な意味をもつ (小西 1999: 89) が、この「存在」は「一時的」であっても、そうでなくてもよい。たとえば、‘be’の定義 ‘used to say something about a person, thing or state, to show permanent or temporary quality, state, job, etc.’ (*Cambridge International Dic. of English* 1995) が参考になる。とくに、‘be’のもつ「存在」の意味について、この定義では、それが「永続的ないし一時的」(permanent or temporary) とある点に注目しておきたい。

このことから、

10. a ‘be V ing’の意味は、‘V ing’があらわす「一瞬」の場面が (一時であれ、永続的であれ) 「存在する」⁽²⁾ ということ、

になる。いま、read を例に図示すると、下の (10 b) のようになる。

10. b



read には、「始め」と「終り」がある。その途中に「一瞬」をきりとった reading が「存在」(be) する。‘be’ (「存在」する期間は、すでにみたように一時的でも、永続的でもよい。)

始めから終りまで全体としてみる「単純形」(たとえば read) とちがい、(read-

ing をふくむ)

10. c 'be V ing' は、時間の経過と事態の変化に注目した表現法である、

ことに注目しておきたい。

'be V ing' について「話し手は場面の始まりと終わりの部分を無視して、その途中だけを示す」('the speaker just refers to the middle or the situation, disregarding its beginning and end' Declerck 1991 : 157) といういい方は正しい。⁽³⁾ここでは、'be V ing' の意味は、上の (10 a, b, c) に求められなければならない、ということを確認しておきたい。

以下では、'be V ing' がもつさまざまな意味が、どのようにして (10) から導きだされるか検討することにする。

2.1 「進行」

11. a John crossed the road. (= 3 a)

b John was crossing the road. (= 3 b)

(11 b) が「進行」をあらわす、というとき、これは「John が道路をよこぎる「途中」にあった」ということであろう。つまり、これは、よこぎる「過程」をのべたもので、よこぎり始めてから、よこぎりきるまでの「途中」のひとこまを切り取って、その「一瞬」を表現したものとおもわれる。よこぎり始めてすぐあとの「一瞬」でもよいし、よこぎりおわる直前の「一瞬」でもよい。もともと 'V ing' は「一瞬」をきりとった表現であるから、「進行」のばあい、'V ing' のあらわす「一瞬」が一時「存在」することが be でしめされている、ということになる。「進行」は、べつのいい方をすると「未完了」ということにもなる。「未完了」は「完了」にたいするものであるが、これには「完了」するまでのいくばくかの時間のながさが感じられる。これはあくまで 'V ing' のもつ意味では

なく、すでにみた be のもつ「永続的」ないしは「一時的」な「存在」の時間のためであるはずである。いずれにせよ、‘be V ing’のもつ「進行」の意味は、(10) から無理なくみちびきだすことができることは明白である。

2.2 「習慣」

12. a Jack is walking to school this semester.
- b If a dog is always barking, don't hit him.
- c He's making \$ 80 this week.

(12 a) の this semester を now にかえてみると、is walking は、まさしく walk という動作が現在「進行」していることをしめしているといえる。ところが、semester では walk という動作の「一瞬」が this semester 中にきりとることができることをしめしていることになる。通例、学校に登校するのは、日に一度であろうから、semester 中、毎日、walk する途中、その動作の「一瞬」をきりとった表現ができることになる。この「一瞬」のきりとりが、semester 中に、いくどか「存在」することをあらわす。つまり、この場合、be (「存在」) の期間は semester の間だけつづくことになる。(もちろん、話している時間に walking をしている必要はない。) この「くりかえし」は「習慣」とよぶことも可能であろう。(12 b) では、always でもしめされているように、bark という動作について、それをどの「一瞬」でもきりとりが可能であることをのべていることになろう。

しかし、これは ‘be V ing’ そのものが「習慣」をあらわしていることを意味しない。たとえば、He goes to school every day. では「単純形」(goes) が「習慣」をあらわしている。(12 c) について、太田 (1959 : 341) が、「孤立した経験を集積してゆく」といっているのは、「くり返し」の一例と考えられるが、これこそ ‘be V ing’ の ‘V の「一瞬」をきりとり、それが、ある時間存在した」という意味で、‘be V ing’ の原義をもっともよくあらわしているといえるだろ

う。

2.3 「未来」

13. a We're leaving tomorrow.
 a' We leave tomorrow.
 b Father is taking us to the zoo next Sunday.

(13 a, a') ともに、現在時制でありながら「未来」をあらわすことができるが、確定度がつよいのは (13 a') である (江川 1985 : 216)。(13 a, a') ともに、未来のことを確定した事実のように表現し、その動作について確信をつよくしめしており、(13 a) では、その動作の「一瞬」をきりとり、その瞬間についてだけかぎってのべている分だけ (13 a') よりも確信の度合いがよくなる、とっていいであろう。ここで問題になるのは、現におこっていない未来の「一瞬」をどうしてきりとり、その「一瞬」を「存在」するように表現できるのか、ということである。'V ing' そのものに「未来」の意味はないのであるから、'be V ing' が「未来」の意味をもつのは、'V ing' そのものよりも、一時的でも、永続的でもよい be のもつ意味のひろさのせいであると考えなくてはならない。

Schibsbye(1970 : 66) は、このことについて、「明白に完了的な連想」(a clear perfective association) をともなう動詞では①「進行中の行為」②「行為の未来の完了」というふたつの側面をもちやすい、という。場合によっては、②が優勢 (dominant) になり、未来をあらわすこともある、とのべ、I am leaving tomorrow. という例文をあげている。

しかし、これでは、'be V ing' が「未来」をあらわす説明にはなっていない。なぜなら、例文の tomorrow を now にかえると突然「未来」の意味はなくなる。とすると、am leaving の am が、現在、未来をしめしうる可能性をもともともっており、あとにくる副詞によってどちらかにきまる、と考えたほうがよい。時制をになう be は、「想像上の時間」('imaginary time') (Quirk et al. 1985 : 209)

でもよい。未来のことは、確信のつよいことほど、ありありと「現在的」に意識されるのである。

安井 (1996 a : 621) は、英語の動詞の進行相には「大きく、習慣、過程、未来の三つの 意味がある」という。ここで、「過程」とは「進行」に相当するであろう。以上、2.1、2.2、2.3によって、この三つの用法が(10)の考えで説明可能であるといえるであろう。

3. ‘be V ing’ にまつわって、問題になりやすい三つの点

3.1 2.2 でみた「くり返し」に関連して話題になるのが、

14. a Bombs are exploding in the battle field.
- b Many guests are arriving at the hotel.

などの例である。ものの性質上、個々の爆弾が爆発する(「瞬間動詞」(momentary verb)) 途中であるとか、「推移出来事動詞」(transitional event verb) である arrive の例で、個々の客が到着をくりかえす、ということは考えにくい。⁽⁴⁾ここでは、その explode, arrive するものが複数あり、そのべつべつのものについて、その「一瞬」をきりとった場面が連続して、「いく度」かおこった(‘a series of events’Leech 1989 a : 20), ということで説明がつかう。

3.2 さらに、「状態動詞」は‘be V ing’にならない、ということについて考えてみる。

15. a *He is resembling his father.
- b He is resembling his father more and more as the years go by.

「状態動詞」はそれじたい時間的なながさをもつものであるから‘be V ing’に

はならない、というのが (15 a) が非文となる理由とされている。ところが (15 b) のように、more and more as the years go by というような段階的な副詞をつけると許容される。これはどうしたことであろうか。

すでにみたように、‘be V ing’ というのは、Vのあらわすものの「一瞬」の場面をきりとったものが「存在」する、ことをしめすものであった。このように ‘be V ing’ は、Vのあらわすものの時間的な変化につよく注目した表現であるが、resemble のような場合、resemble していること、そのことが問題なのであって、一瞬、一瞬の変化は考えにくい⁽⁵⁾し、問題にもなりにくい。これが、一般に「状態動詞」が ‘be V ing’ につくらない、という理由であるはずである。

しかし、resemble でも、似ていることもさることながら、むしろ、時間的な変化に注目がいき、「一瞬」、「一瞬」のきりとられた場面の変化に関心があるときには、むしろ当然のこととして、「もはや「状態動詞」ではなくなり」(‘no longer a state verb’Leech 1989 a : 31), (15 b) のように許容されることになるとみるほうが正確であろう。

3.3 つぎに、‘be V ing’ が「丁寧さ」をあらわす (‘more distant, more polite’ Eastwood 1994 : 78, ‘social distancing’ Celce-Mulcia and Larson-Freeman 1999 : 118, ‘polite and tentative’Leech 1989 b : 395)、ということについて考える。

16. a I must go.
 b I must be going.
 c Will you be using the car tomorrow? If not, can I borrow it?
 d Did you wish to see me now?
 e Were you wanting to see me?

(16 a) にたいして (16 b) では、be going にすることによって、その行為が「短時間」ないし「一瞬」ですすぎる (‘temporariness’ Leech 1989 a : 29) 動作

として表現することによって衝撃をそらし、結果的に「丁寧さ」を表現できる (Swan 1980 : 159) のである。これと同類の事実として論じられるのは、「過去時制」、いわゆる「態度の過去」(‘attitudinal past’ Quirk et al. 1985 : 188) による (16 d) である。ここでは、現在のことをすでにすぎたこととして表現することによって衝撃をかわすといってもよい。(16 e) では、「過去時制」・‘be V ing’をあわせて、「いっそう丁寧」(Swan 1980 : 496), (‘more polite and tentative’ Greenbaum 1996 : 277, ‘lack of commitment’ Leech 1989 a : 29) にしたものである。このように ‘be V ing’ は、話し手の「心的態度」(mental attitude) (Leech 1989 a : 29) をあらわすことができる。

3.4 おわりに、‘be V ing’が「感情」を表現する、ということについてふれる。

17. a You’re always finding fault with me.
- b Bill is continually/always/forever working late at the office.
- c A child is always learning.
- d Day by day we are getting nearer to death.

(17 a) は、「いつもあらさがしばかりしている [からいやだ]」(江川 1985 : 231) と訳されるように、「拒否のきもち」(‘feeling of disapproval’ Quirk et al. 1985 : 199), ‘undesirable’ Huddleston and Pullum 2002 : 167) が表現される。これは、この種の文によくあらわれる副詞、always, continually などにもみられるように、そこにあらわれる動詞のさすもののどの「一瞬」をきりとっても、「常に」、「絶えず」その動作をしていることをしめしており、そのことにたいする「いらだち」がでてしまうのである。(17 d) では「執拗」(‘persistent’ Leech 1989 a : 33) も表現されている。しかし、一般に「アスペクトは感性的であり情感的である」(泉井 1969 : 85) とはいうが、‘be V ing’ そのものが「感情」をあらわしているわけではない証拠に (17 c) の文はすこしも「劣悪化」(deterioration) の意味をもたない (Quirk et al. 1985 : 199)。

4. 'be V ing' の特質

4.1 一般に、'be V ing' は 'of limited duration' 「限られた期間（時間）つづく」(Schibsbye 1970 : 65) と定義される。しかし、be の定義でみたように、be の「存在」するという意味は、「永続的ないしは一時的」に「存在」することである。「単純形」がVのさすものを始めと終わりがある全体としてみるのにたいして、'be V ing' は、時間の経過とそれにもなう事態の変化に注目した表現となることにもっとも大きな特徴があることはすでに (10 c) でみた。細江 (1944 : 112) は、この点に関連して、(18) の文でつぎのようにいっている。

18. a He waited until she came.
 b He was waiting until she came.

(18 a, b) で、彼が待っている時間は「寸秒の差」もないが、(18 a) では「只彼が待ったといふ事実を率直簡明に述べるか、若しくは多少の思想の低回を以て叙するだけである」のに反し、(18 b) では、「注意を彼なる男の取った態度に集中させてこれを叙したもの」という。また、「或事柄に注意を集中させつつこれを述べる」(1944 : 116) ともいう。注意を「態度に集中」、「事柄に注意を集中」とは、まさしく「事態の変化に注目」して表現していると考えていいであろう。こうしてみると、'be V ing' は、話し手が、どこに注目しながらのべているか、すぐれて「心理的な性格」('psychological character') のもので「話者の視点」('a speaker's point of view' (Leech 1989 a : 19)⁽⁶⁾)にかかわるものであるといっている。

4.2 このことが、'be V ing' のどのような「ふるまい」にかかわってくるか、簡単にみて、'be V ing' の特質を確認しよう。

4.2.1 まず、つぎの例をみよう。

- 19. a Bill is always *arguing*.
- b Bill always argues *well*.
- c *Bill is always *arguing well*.

(19 a, b) が許容されるのに、(19 a) の *is arguing*、(19 b) の *well* とが組み合わされた (19 c) が許容されないのは、なぜであろうか。

この理由は、つぎのように考えられる。(19 a)の焦点は *arguing* であり、(19 b) では *well* である。(19 c) では、焦点となる *arguing, well* が「衝突」をおこなっている。この「衝突」については、つぎの例をみよう。

- 20. a A man spoke *from India*.
- b *A man spoke *English from India*.
- c *A man spoke *softly from India*.

Guéron (1980)

(20 a) で、文尾に移動された *from India* は焦点となっているが、(20 b), (20 c) では、それぞれ、*English, softly* があり、これらがその焦点と「衝突」して非文をつくっている。

ひとつの文には焦点になるようなものが、複数あってはならない。(19 c) の非文は、(20 b, c) の非文とおなじ理由のはずである。つまり、非文となる (19 c) では、*is arguing* は *well* と「衝突」するほどの大きな情報をにになっていることになる。これが、ほかならぬ ‘be V ing’ は「注意が集中した」表現であることの証となるであろう。

4.2.2 これはまた、つぎの例でもみられる。

21. a “Ouch,” squeaks Minnie, agreeably frightened.
 b * “Ouch,” *is squeaking* Minnie, agreeably frightened.

(21 a, b) から、「主語と本動詞が倒置された平叙文では進行形を用いることはできない」(荒木 1996: 229) と説明されているが、なぜ「倒置」文で ‘be V ing’ は非文になるのであろうか。ここでも、4.2.1. でみたのとおなじ理由がはたらいっていると思われる。(21 a) では、倒置されて後にきた Minnie が焦点であるはずで、(21 b) では、これがもうひとつの情報ゆたかな *is squeaking* と「衝突」しているのが理由だと考えることができる。このことは、つぎの例でもあきらかであろう。

22. a A man came in *with blue eyes*.
 b * A man *was coming* in *with blue eyes*.

Rochemont (1985)

(22 a) で、焦点は *with blue eyes* であるが、(22 b) ではこれと *was coming* が衝突していることになる。

4.2.3 さらに、このことの妥当なことは、つぎの例でもはっきりする。

23. a * There is occurring a riot.
 b * There *was developping* a bad situation. (荒木 1986)
 c * There *was being* a man nasty to me. (Stowell 1978)

もともと、*there* 構文は、不定名詞などをあたらしい情報としてみちびきだす構文であり、動詞はこの情報と「衝突」しない「軽い」(light) 動詞、情報量のすくないなものがくるのが普通である。この (23 a, b) で焦点は、それぞれ a riot, a bad situation であるが、‘be V ing’ になると、その部分が、その焦点

と衝突してしまう。荒木 (1986 : 781) は、はっきり「there 構文の動詞は進行形にすることはできない」とのべている。

(21) の「倒置」、(22) の「後置」、(23) の there 構文は、ともに後方に要素を位置させ、それを焦点とするはたらきがある。(19 c), (21 b), (22 b), (23 a, b, c) の非文は、V を、‘be V ing’ とすることにより、もともとの焦点と「衝突」していることが、それぞれ非文の原因となっている。

‘be V ing’ にするということは、このように、話し手の注意が、その部分に集中した表現をつくってしまう、のである。つぎのことばもそのことを裏付けてくれる。

24. ‘the progressive adds the feature of duration to enable us to *focus on what is (or was) going on.*’(Huddleston and Pullum 2002 : 179) (斜体引用者)⁽⁷⁾

以上のことから、‘be V ing’ は、情報を多くふくむ表現になっていることは確かで、これはほかならぬ、その場面に注目し、表現した結果にほかならない。「何物よりも強く吾々の注意を惹き、吾々の注意を集中せしむるものは現象の推移である」(細江 1944 : 128) という。‘be V ing’ は、V そのものより時間とともに刻々とかわる事態の変化に話し手の注意が集中した表現であることが確認できる。

ながいテキストのなかでは、「単純形」は出来事をのべるのに適しており、いっぽう ‘be V ing’ は「物語の背景を表す」ことを「唯一の機能」である (Weinreich 1982 : 176) というが、これは、「進行」中のできごとにたいして、「始めと終り」を表せる「単純形」は、個別的に出来事を表しやすい、ということであろう。しかし、このことは、ここでみた ‘be V ing’ の性質とすこしも対立するものではない。「単純形」と比較するかぎり、‘be V ing’ がもつ「注意の集中された表現」という性質、つまり、この個所がおもい情報をにないやすいということは否定しがたい。

5. まとめ

本稿は、‘(be) V ing’の意味について検討した。まず、「現在分詞」‘V ing’を「Vのあらわすものの「一瞬」をきりとした場面をあらわす」とし、‘be V ing’は、「「一瞬」の場面が存在する」という意味をもつことをしめした。この形が、「進行」、「習慣」、「未来」をあらわすことができるのは、‘be’のもつ「存在」には「永続的ないし一時的」と、あらわす時間に幅があるためであることもしめした。そのほか、‘be V ing’がもつ「丁寧」、「感情的」などの性質も、おなじ理由で説明できることもしめした。

また、‘be V ing’は、なによりも、話し手が時間の経過とともに刻々とかわる事態の変化に、ことさら注意をむけた表現で、大きな情報をにないやすいことをしめした。

最後に、‘V ing’をめぐって、二つのことをつけ加えたい。まず、一つめは、「分詞構文」における‘V ing’についてである。

25. a Being a sailor, John smokes a pipe.
b *John is being a sailor.
26. a Having finished his work, John went to bed.
b *John's having finished his work.
27. a Weighing five tons, our truck made the bridge shake.
b *Our truck was weighing five tons.

ここでは、それぞれ (a, b) の文から、「分詞構文」の‘V ing’は、「進行形」の‘V ing’とはちがう（中島 2001 : 544）とするものである。しかし、このこと

‘(be) V ing’の意味と特質 (葛西清蔵)

は、すでにみてきたように、‘V ing’、つまり、‘V’のあらわすものの「一瞬」をきりとした場面、と、その「場面が存在する」こととはべつである、ことによつて説明ができるであろう。さらに、

28. a Suspecting him to accept bribes, the judge convened a grand jury to look into the matter.

b * The judge suspected him to accept bribes.

29. a Knowing them to detest John, I didn't invite him to the party.

b * I knew them to detest John.

(28), (29) は、「分詞構文」に対応する「定動詞文」がない (Bolinger 1974 : 74)、とするものである。「定動詞」と‘V ing’という関係では、(25), (26), (27) とかかわることはたしかであるが、さらに検討が必要であろう。

いま一つは、Van den Laaf (1949 : 210)が、「動名詞」をふくむ

30. Living is working.

(30) の文について「Gerund は未完了を表す」といっているところをみると、「未完了」という用語を中心に、「現在分詞」と「動名詞」を関係づけて説明ができるのではないかという予想をたてることができるが、これは今後の研究課題としたい。

註

(1) i In this photograph John is winking at the camera.

この (i) について Declerck (1991 : 162) は「行為が凍結されている」(The

action...has been frozen here.) と、‘V ing’には「動き」がないことを「凍結」といっていることも参考になる。

さらに、田窪・笹栗 (2002 : 142) が、(ii), (iii) の「ところ」について、

ii 警察は泥棒が窓からでてくるところを捕まえた。

iii この写真はもちつきをしているところだ。

(ii) では「一連の行為から場面の切片を取り出」しており、(iii) では、シーンの系列から一コマを切り出す」といった機能がある、というのもおなじことであり、参考になる。また、

iv a *Kim glimpsed the thief sneak through the window.

b Kim glimpsed the thief sneaking through the window.

(iv a) で、glimpse が sneak をとらない理由は、‘bare infinitive complements denote actions that are bounded in time’であるが、これは glimpse の「一瞬」とあわない、(Pizer 1994 : 341) とするのは妥当であるが、V ing について、‘the action ... extends beyond the temporal scope of the perception’ (1994 : 342) というのは、基本的に不適切である。

(2) ‘V ing’には、‘be’による「存在」(これは「瞬間的であうことも、何千年であることもある」(安井 1970 : 65) のほか、‘keep (on)’, ‘go (on)’などに(Quirk et al. 1972 : 53) によって「連続的に存在する」(継続)を表現する方法もある。

(3) 「進行形」が、時間の経過に注意した表現であることは、「動的」(dynamic) (Zandvoort 1962 : 37, 38) や、「前の時間との対象をつよめる」(太田 1959 : 1353) などとも参考になる。また、「未来」をしめす場合について、安井 (1987 : 196) が「ある状態から別の状態へと刻々と変化する」といっているのもおなじ主旨である。

このことは、

i I saw him coming.

ii I saw him come.

(i, ii) について、Sweet (1958 : 123) が、(ii) は ‘mere atatement of a bare fact’ であるのにたいして、(i) を ‘more descriptive’ であるとのべているのに

関係すると思われる。

(4) i The child was jumping (=several times)for joy.

(i) は「反復をつよく暗示し」(‘powerfully suggests repetition’) ているが、この種の動詞が、かならずしも反復を意味するわけではない、として(ii)の例をあげている。(Quirk et al. 1972 : 96)

ii The man was jumping off the bus when the policeman caught him.

(5) ‘States are’ like-parted ‘in that every segment of a state has the same character as any other segment’ (Quirk et al. 1985 : 198) はこのことをよくしめしている。

(6) 太田 (1959 : 1381) に Deutschbein (*Grammatik*: p.115)からの、つぎのような引用があり大いに参考になる。

‘Die Aspekte sind subjektive Anschauungsforme: Sie bezeichnen die Perspektive,d.h.die Art und Weise, wie der Sprecher das Geschehen ansieht, wie er es von seinem Standpunkt, seinem Gesichtswinkel aus erlebt (his attitude of mind).’

(7) i God knows what this meal is costing.

(i) について Leech (1989 a : 396) が「一時的な意味をつよめる」(‘to emphasize temporarily meaning’) というのも、一時性を強調しているともいえよう。

参考文献

安藤貞雄 1983 『英語教師の文法研究』大修館書店

荒木一雄 (編) 1986 『英語正誤辞典』研究社出版

————— 1996. 『現代英語正誤辞典』研究社出版

Biber, D. Johansson, S. Leech, G. Conrad, S. Finegan, E. and R. Quirk, 1999
Longman Grammar of Spoken and Written English Longman

Bolinger, D. 1974 ‘Concept and percept: two infinitive constructions and their vicissitudes’ *World Papers in phonetics* Festschrift for Dr. Onishi’s

Kiju 65-91 The phonetic Society of Japan

Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman, 1999 *The Grammar Book* (2nd edition) Heine & Heine

Declerck, R. 1991 *A Comprehensive Descriptive Grammar of English* Kaitakusha

Eastwood, J. 1994 *Oxford Guide to English Grammar* Oxford Univ. Press

江川泰一郎 1985 『英文法解説』 金子書房

Greenbaum, S. 1996 *The Oxford English Grammar* Oxford Univ. Press

Guéron, J. 1980 'On the syntax and semantics of PP extraposition' *LI* 11-4: 637-678

細江逸記 1944 『動詞時制の研究』 泰文堂

Huddleston, R. and G.K. Pullum, 2002 *The Cambridge Grammar of the English Language* Cambridge Univ. Press

泉井久之助 1967 『言語の構造』 紀伊国屋書店

Jespersen, O. 1961 *Modern English Grammar* Vol. 4

————— 1977 *Essentials of English Grammar* George Allen and Unwin

Kirsner, R. and S. Thompson, 1976 'The role of pragmatic inference in semantics: a study of sensory verb complements' *Glossa* 60: 200-240 安

井 (編) 1975

『海外英語学論叢』 145-190 英潮社

小西友七 (編) 1999. 『英語基本動詞辞典』 研究社

Leech, G.N. 1989a *Meaning and the English Verb* (2nd edition) longman

————— 1989b *An A-Z English Grammar and Usage* Nelson

Mossé, F. 1938 *Histoire de la périphrastique être + participe présent en Germanique* Paris

中島平三 2001. 『英語構文事典』 大修館書店

中島文雄・毛利可信 1957 『高等英文法』 山口書店

太田朗 1959. 「進行形」 『英文法シリーズ 第二集』 研究社1329-1397

- Palmer, F.R. 1987 *The English Verb* (2nd edition) Longman
- Pizer, K. 1994 “Perception verb complementation: a construction-based account” *CLS* 30, 335-346
- Quirk, R. and Greenbaum, S. and Leech, G. and J. Svartvik, 1972 *A Grammar of Contemporary English* Longman
- 1985 *A Comprehensive Grammar of the English Language* Longman
- Rochemont, M.S. 1985 *The Theory of Stylistic Rules in English* Garland
- Schibsbye, K. 1970 *A Modern English Grammar* Oxford Univ.Press
- Stowell, T. 1978 ‘What was there before there was there’ *CLS* 14: 458-471
- Stump, G.T. 1985 *The Semantic Variability of Absolute Constructions* Reidel
- Swan, M. 1995 *Practical English Usage* (2nd edition) Oxford Univ. Press
- Sweet, H. 1958 *New English Grammar Part 2* Oxford Univ. Press
- 田窪行則・笹栗淳子 2002. 「日本語条件文と認知的マッピング」『認知言語学 II：カテゴリー化』大掘壽夫（編）135-161 東京大学出版会
- Van der Laan, J. 1949 『現代英語進行形の研究』（斎藤静訳）白桃書房
- Weinreich, H. 1971 *Tempus* 脇坂豊ほか訳 『時制論』1982 紀伊国屋書店
- 安井稔（編）1987 『現代英文法事典』大修館書店
- 1996 a 『コンサイス英文法辞典』三省堂
- 1996 b 『改訂版 英文法総覧』開拓社
- Zandvoort, R.W. 1962 *A Handbook of English Grammar* Maruzen